

一人一人が未来の創り手となる豊かな学びの創造

— 小学校校国語科における「問い」と「振り返り」の工夫を通して —

指導主事 志賀 裕美

研究協力員 小国町立小国小学校 教諭 島田 恵

1 はじめに

これからの社会において、一人一人が社会の担い手として質的な豊かさを持ち新たな価値を生み出していくことが求められている。そのために、学校教育には、未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することが求められている。小学校国語科においても、生きて働く国語の力を育成することが求められているが、児童が学んだことを十分活用できていないという学校現場の課題が見られる。本実践では、「読むこと」領域において学んだことのつながりを意識した授業づくりを行うことによって、一人一人が学んだことを次に生かそうという意識を持つことをねらいとしている。そして、このことが、教室の中にとどまらず、学んだことを実生活で活用することにつながっていくと考えた。

2 研究の視点について

(1) 視点1『「見方・考え方」に着目した問いの工夫』について

国語科における「見方・考え方」とは、「言葉による見方・考え方」のことである。「言葉による見方・考え方を働かせる」とは、新学習指導要領解説国語編において、「児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる」と示されている。このことから、「読むこと」においては、理解する際に「どんな言葉が使われているのか」「なぜ、こう考えられるのか」「この表現による効果はどうか」など、吟味・判断・評価したりすることが、生きて働く読みの力を育成することになると考えた。

そこで、「言葉による見方・考え方」を働かせることにつながる問いを設定し、表現の工夫を捉えたり、理解を深めたりしながら読ませることにした。このような経験を積み重ねることは、児童自らが「言葉による見方・考え方」を働かせ、正確に理解したり、適切に表現したりすることにつながると考える。

(2) 視点2「学びを実感する振り返りの工夫」について

児童が学びを実感するには、まず、既習事項を活用したり関連付けたりして理解を深め、表現できたという経験が大切である。その上で、「何が分かったか」だけでなく、「どのように学んだか」という視点でその経験を振り返ることが必要である。これらの視点に基づき、自分の考えの変容や他者の考えとの比較・吟味を行うだけでなく、学んだことを可視化できるようにする。このような振り返りが繰り返されることで、どのような学び方をしたかも振り返ることとなり、学んだことが次につながっていくと考える。

3 研究の実践

検証授業 小学校第4学年

単元名 「アップとルーズで伝える」

(1) 本単元の授業設計

本単元は、小学校学習指導要領解説国語編第3学年及び第4学年の「C読むこと」「イ 目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。」「エ 目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりすること。」の学習である。

本教材「アップとルーズで伝える」では、分かりやすい説明とはどのようなものであるかを学ぶ。本単元では、既習事項に加えて段落同士の対比関係、段落内での対比関係の効果に着目し、段落が文章全体の中でどのような役割を果たしているかを考えていく。「対比して述べることで二つのものの違いがより明らかになる」という新たな学びが、他の文章を読む時だけでなく、児童自身が話したり書いたりして説明する際にも役立つという意識を持たせたい。このような学び方を体験することにより、「言語を手掛かりとしながら論理的に思考する力」を育成することが

できると考え、本単元を設定した。

(2) 単元の目標

◎それぞれの段落が全体の中でどのような役割を果たしているかを考えながら読むことができる。

○写真と対応した部分に注意して読み、「アップ」と「ルーズ」それぞれの特徴を整理することができる。

(3) 単元計画

単元を貫く問い：筆者（中谷さん）の伝える工夫を発見しよう

第一次第1時 「単元を貫く問い」について自分の考えをまとめる。

第二次 教材「アップとルーズで伝える」第1～6時 から、筆者の書き方の工夫を発見し、まとめる。

第三次第1時 身の回りにある写真の使われ方について考え、学習を振り返る。

(4) 研究の視点

〔視点1〕

筆者の説明の工夫の効果に着目させる問いとともに、そのよさについて検討させる問いを工夫する。

〔視点2〕

振り返りの中で、自分の文章に使ってみたい工夫をポートフォリオに書かせることで、学びを可視化する。振り返りの視点を明示し、学習過程・自己変容についても振り返らせる。

(5) 授業の実際

①第一次第1時～第二次第3時

第一次第1時において、「単元を貫く問い」を示し、初読の段階で発見した説明の工夫を書かせることで実態を把握した。

第二次第1時では、写真を手がかりとして教材文を並べ替えることにより、書かれた順序を意識させた。第2時では、問いの文を探させ「なぜ、第3段落に『問い』があるのか。」と問うことで、第1・2段落の役割や対比で書かれていること等をつかませた。第3時では、第4段落と第5段落の内容と順序を意識させるため、3種類の「このように」を含むまとめの文を提示し、「どれがいいですか」とい

う問いかけをした。このことで、順序のような形式面だけでなく、第4・5段落が対比されて書かれていることやその内容についても考えさせ、段落の関係をつかませた。

このように、教師が意図的に「筆者の説明の仕方」に意識が向くような手だてとともに問いの工夫を行い、「言葉による見方・考え方」を働かせて読めるようにした。

②第二次第4時

まず、前時の学習を振り返った。そして、第7段落と第8段落を省いた教材文を配った上で、「これで全部でしたね。」と児童に確認した。

児童は、それに対して他の事例が挙げられていたことを記憶だけを頼りに答えていた。そこで、改めて第7段落と第8段落と出会わせ、「(第6段落に)『このように』とまとめてあるからこれはいらないんじゃないんですか。」と問いかけた。(視点1)

教師による「(第7・8段落は) いらないんじゃないか」という「言葉による見方・考え方を働かせる」問いが、「教科書に書いてあるのだから、あるのは当然」と思っていた児童の思考を揺さぶることとなった。そこで、児童は「なぜ必要なのか」という意識を持って改めて教材文と向き合うこととなった。

この時、児童同士で次のようなやり取りが行われた。

児童A：長くなったら伝わらない（だからいらない）。

児童B：『動いて考えてまた動く』も長かったよ。

児童C：『すがたを変える大豆』も『このように』のあとがありましたよ。

児童は、このやり取りの中でこれまで学んできたことと関連付けて考えを伝えていた。「このように」



という言葉があるから最後なのではないという考えを経験を理由付けとして伝えようとしていたが、この時には、この教材「アップとルーズで伝える」に書かれている内容からは根拠を示せなかった。

そこで、「あると」「ないと」という二つの視点を与え考えさせることで、第7段落と第8段落の内容面に目を向けさせた。**(視点1)** その際、ある児童の「8(段落)があるのは納得できるけど、7(段落)があるのは納得できない。」という発言によって、より一層それぞれの段落の役割について考える必要性が生まれた。この発言を教師が適切に取り上げることで、次のような児童の発言が引き出された。1つ目は第7段落の役割について考えた児童Bの発言である。



(7段落は) あると、テレビだけでなく新聞にもアップとルーズが使われているのがわかる。ないと、テレビだけにアップとルーズを使っていることしか分からないからです。

2つ目は、第8段落の役割について述べる児童Dの発言である。

8(段落)があると、筆者の考えが分かる。ないと分からない。

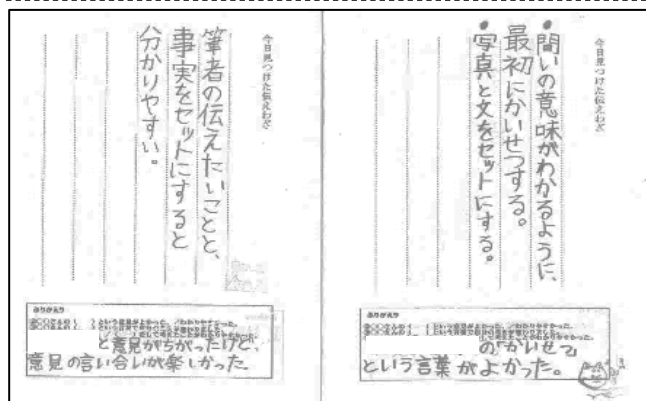
しかし、この発言では説明が十分とは言えない。児童Dは発言を促されて次のように述べた。

筆者の考えは「受け手が知りたいことは何か、送り手が伝えたいことは何か～」のところ、それがないと、筆者の考えが分からない。

この発言によって、根拠となる筆者の考えが第8段落に書かれていることが明らかになった。このような発言を受けて、問いの答えが第6段落にあり事実が述べられていること、第7段落にはテレビ以外の事例を挙げていること、そして第8段落には、筆者の考えが述べられていることが整理された。

授業の終末に学びを振り返ってポートフォリオに書く時間をとった。次に示すのは、ある児童の発言とポートフォリオである。

筆者の伝えたいことと事例をセットにするとわかりやすいです。



資料 児童の書いたポートフォリオ(一部)

ここには、第7段落と第8段落の役割を考えたことを受け、他の事例を挙げた上で筆者の伝えたいことをまとめるという工夫が「分かりやすさ」につながっていることが児童なりの言葉で表現されていた。

(視点2)

この授業において考えを変えた児童はその理由について次のように答えた。

筆者の考えがあった方がいいなあと思いました。なんかみんなが筆者の考えがあった方が(言いたいことが)伝わりやすいと言っていて、それに納得したからです。

この児童は、各段落の役割を考える前は「長くなるから必要ない」と言っていた。しかし、友達の考えを聞いたことで、「筆者の考えがあった方が伝わりやすいと言っていて、それに納得した」と考えを変容させていた。

(6) 検証結果と考察

表1は、「見方・考え方」に着目した問いの工夫に関する質問紙調査の結果である。特に項目11と項目15において意識の向上が見られた。

表1 「学習に関するアンケート」結果より抜粋 (n=28) 4件法

	質問	事前	事後	差
11	あなたは、国語の授業の中で、どんな表現があるか、どんな書かれ方をしているか見つけ、そのことについていいかどうか考えながら学習に取り組んでいる。	2.71	3.30	0.59
15	あなたは、国語の授業を通して、自分の思いや考えを生かしながら、新しい考えをもつことができています。	2.86	3.26	0.40

項目 11 については、問いの工夫が段階的に行われたことにより、児童は自然な流れで各段落の役割と必要な理由を考えることができたため、意識が向上したと考えられる。最初に、第 7 段落と第 8 段落を抜いた教材を渡し、それらの段落が必要かどうか考える問いにより、児童は書かれている内容が何かを強く意識して考えることにつながったと考えられる。さらに、教材を改めて読み、「あると」「ないと」という複数の視点から段落の必要性を考える学習活動を行ったことで、児童は各段落の役割の違いに気付くことができたと考える。そして、「人に伝えることを目的とした文章においては筆者の考えや事例が必要である」と、友達の考えを聞き考えて納得したため、自分の考えを変容させた児童がいたと考えられる。

また、項目 15 の向上については、児童が、「筆者の工夫」を「分かりやすい書き方」として意識したことを示していると考えられる。

単元の最初に気付いた筆者の工夫
アップとルーズを比べている。
写真を使っている。



単元の最後にまとめた筆者の工夫
事例 対比 筆者の考え
写真と文をセットにする。
一番伝えたいことを最後に書く。
問いの意味が分かるように最初に解説する。等

上記に示したのは、児童が単元の最初に気付いた筆者の工夫と単元の最後にまとめた筆者の工夫である。これらの内容から、最初は書かれている内容だけに着目していた児童が、最後には分かりやすい書き方についても意識してまとめることができたことが分かる。筆者の説明の工夫に目が向くような問いを行ったことで、それらが重要であると児童に意識されたことを示していると考えられる。

次に示す表 2 は、「学びを実感する振り返り」に関する意識調査の結果である。特に、項目 5 に関して意識が向上した。

表 2 「学習に関するアンケート」結果より抜粋 (n=28) 4 件法

	質問	事前	事後	差
5	あなたは、国語の学習で何を学んだのか、どのように学んだのかについて振り返っている。	2.50	3.15	0.65

振り返りの時間において、ポートフォリオに学んだことや友達の考えについて感じたことを毎時間まとめたことで、項目 5 の何を振り返るかという意識の向上につながったと考えられる。

児童は、ポートフォリオに参考にしたい「筆者の工夫」について書くことができた。また、単元を振り返って書いた感想には、「アップとルーズの写真だなあと思うようになってきた。相手が伝えたいことは何か考えて分かるようになってきた。」とあり、身の回りにある新聞や広告等を見た時に、アップなのかルーズなのか考えたり、何を伝えたいのか考えたりする意識の高まりがうかがえる。

また、単元を振り返って、「今まで見つけた工夫を使うとさらにいい説明文にできるんだ。」という感想もあり、読むことによって発見した工夫が分かりやすさにつながっていることを実感したからこそ、書くことに生かそうという児童の意識が高まったと考えられる。

4 研究のまとめ(成果と課題)

視点 1 については、「言葉による見方・考え方」につながる問いの工夫として、問いを段階的に行ったことにより、内容を読み取るだけでなく、表現する際に活用したい「書き方」として理解できた。このことから、問いを段階的に行うことは、「見方・考え方」を働かせて読むために有効だったと考える。

視点 2 については、振り返りの視点を明示し、ポートフォリオとして継続的に残していったことで、全体を振り返り、学んだことを活用しようという意識を持つことができた。よって、学んだことを振り返る際には、今後活用したいこと等の視点を明示し意識させることが有効だったと考える。

課題としては、学びをさらに深め、実感させるためには、考えた理由を根拠等とともに伝えることや他者の考えに納得した理由を書かせることなど、より具体的な手だてが必要である。それらの手だての工夫について今後更に検証し、充実させていきたい。

《引用・参考文献》

- ・文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説 国語編」
- ・文部科学省(2017)「小学校学習指導要領解説 国語編」
- ・文部科学省(2016)「国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」